

「場」と言う言葉がある。演劇制作・創造の「現場」でも「場をつくる」ことはすこぶる大事なことである。「場」は、人と人との係わりの《要（かなめ）》をなす時間や空間をなす言葉として、鮮やかな使われ方をしてきた。詩人・長田弘は、『なつかしい時間』（岩波新書 八四頁）「場」をつくる）で次のように言う。

「立場」「持ち場」「現場」「仕事場」「正念場」「相場」「土壇場」「隠れ場」「見せ場」「戦いの場」「出合いの場」（略）「修羅場」のような場もあれば、「濡れ場」のような場 あるいは「やつちや場」のような場もあれば、また「鉄火場」の場もあります。（略）

そのように「場」と言う言葉に表されてきたのは、人と人のあいだのコミュニケーションの光景であり、風景です。ものを引き寄せる磁力がはたらく場が「磁場」と言われるように、人と人の係わり、係わりのあるべきところが、場です。——と。そして、

今日、改革が望まれる様々な問題は、実はすべて「場」の問題です。改革と言うのは、常に「場」の改革だからです。家庭の問題というのは、家庭がそれぞれにとつての「場」たりえているかという問題です。教育の問題というのは、教育がそれぞれの拠つて立つ「場」たりえているかという問題です。街の問題、地域の問題というのは、街が、地域がみんなにとつて楽しい「場」たりえていないという問題です。

今日の問題の多くは、そうしたもつとも切実なものとしての「場」の思想が、おたがいのあいだに、いつか見失われるままになった。そうして、何もかもあたかもゆきたりばつたりのごとくなつてしまった、というところからきているのではないのでしょうか。（略）——と。

詩人のユニークな視点として、改めて受け止め、演劇制作・創造の「現場」で、「場を醸成する」糧（かて）にしたいと思いつつ第一三号の巻頭言とします。